

老健における音楽療法に関する研究 第19報

継続的な個別音楽療法で意思疎通方法が増えた1例

塩谷将彦¹⁾ 美原淑子²⁾ 美原恵里³⁾

1) 公益財団法人脳血管研究所 介護老人保健施設アルボース 介護福祉士

2) 公益財団法人脳血管研究所 介護老人保健施設アルボース 音楽療法士

3) 公益財団法人脳血管研究所 介護老人保健施設アルボース 施設長

【はじめに】

我々は、昨年、全国老人保健施設大会横浜大会にて、脳幹出血による四肢麻痺のクライアントに対し個別音楽療法を実施することで、心理状態の改善と意思疎通が図れた例を報告した¹⁾。今回、同じクライアントに対し、個別セッション中に楽器を演奏することにより意思疎通の方法が増え、意欲の維持がなされたので報告する。

【症例】

49歳、男性。要介護5。X年1月(45歳時)、脳幹出血を発症し、地域の急性期病院に入院、回復期リハビリテーション病棟を経て、X年8月に当施設の利用を開始した。重度の四肢麻痺で起立不能、1日の大半をベッド上で過ごしていた。また、気管カニューレが装着されており発語は不能であった。初回入所時、開眼しているがスタッフからの声掛けに眼を合わせようとせず、家族以外との意思疎通は困難であった。そこで、X+1年1月から2年間に亘り個別音楽療法を実施した結果、家族以外との意思疎通が可能となった。

【方法】

クライアントの意思疎通方法を増やすことと意欲の維持向上を目的とし、施設内個室にて、音楽療法士とクライアント、主介護者の3名で楽器演奏を含む個別セッションを実施した。セッションは、月2回、約1時間程度、音楽療法士のキーボードの演奏に合わせて、歌を歌うことと楽器演奏を実施した。使用した楽器は、ツリーチャイムという楽器で、棒のようなものをスライドさせると音が出る。そのため、クライアントが持ちやすいスポンジ製のオリジナルな棒を作成し、わずかに動く右手を使用して音を出すことから開始した。楽器演奏を行ったセッション回数は6回であった。

【評価方法】

日常生活における心理状態は、日本脳卒中学会・脳卒中感情障害(うつ・情動障害)スケ

ール (JSS-D、JSS-E)²⁾を用いて評価した。セッションの評価は、アルボース式音楽療法チェックリスト (AR-MCL)³⁾を用いた。クライアントの主観の評価は、「はい」「いいえ」「どちらでもない」の3択で答えられる10個のアンケートを作成し使用した。AR-MCLは、「積極性」「持続性」「協調性」「情緒性」「知的機能」「歌唱」「楽器」「動き・運動」「表情」の9項目からなり、それぞれの項目に対して5段階で判定する評価チェックリストである。JSS-D、JSS-E、AR-MCLの評価は、楽器演奏1回目後と楽器演奏6回目後で行った。アンケートは楽器演奏6回目後に行った。

【結果】

日常生活における心理状態に関し、JSS-Dは楽器演奏1回目後0.73点、楽器演奏6回目後は0.73点、JSS-Eは楽器演奏1回目後-0.55点、楽器演奏6回目後は-0.55点となり、うつ・情動障害とも、1回目後と6回目後で変化は見られなかった。

AR-MCLの総得点は、楽器演奏1回目後26点、演奏6回目後32点と増加した。項目別では、「積極性」「持続性」「協調性」「楽器」「動き・運動」において改善が認められた。特に「持続性」については、集中できるようになり、「動き・運動」については、音楽に合わせて右手首、右肘で楽器を演奏する動きが見られた。

アンケートでは、10個全ての質問に対し、右手や脛、首を動かし「はい」と答えることができた。特に「楽器を演奏しようとしていますか?」、「楽器を演奏することは楽しいですか?」の質問に対しては即答した。

介護の現場においては、脛や首を動かして意思疎通を図るだけでなく、右手を動かすことで意思疎通を図ることも可能となった。

【考察】

本症例において、楽器の演奏は新たな意思疎通方法の獲得として捉えられ、新しいことをやりとげるというクライアントの意欲を引き出し、持続性や運動の改善につながったと考えられる。そして、意欲を引き出したのは、クライアント自身の感情を他者に伝えたいという思いが維持継続されたと考えられる¹⁾。

施設生活においても、脛や首以外の意思疎通方法が増え、より明確に意思疎通が可能となり、クライアントの望むより細やかなケアを提供できるようになったと感じられる。

【まとめ】

脳幹出血発症後、限られた方法で意思疎通を図っていたクライアントに対し、個別セッションにおいて楽器演奏を行った。その結果、新たな意思疎通方法を獲得することに成功

した。脳血管障害慢性期で四肢麻痺があっても、音楽療法により身体や感覚の機能を維持し高めることを示した症例である。音楽は人々のQOLを高める力があり、音楽療法は人生を豊かに、生きがいのあるものにするのを支援していく一つの有効な方法であると思われる。音楽療法が全人的ケアの一つの手段として、医療・福祉関係者や一般の人々に、一層認められるようになることを期待する。

[引用・参考文献]

- 1) 塩谷将彦 他：老健における音楽療法に関する研究 第18報. 第26回全国老人保健施設大会 横浜 2015
- 2) 日本脳卒中学会 Stroke Scale 作成委員会編：脳卒中 25. 2003
- 3) 美原淑子 他：日本バイオミュージック学会誌 18. 2000

[100字コメント]

脳幹出血により意思疎通方法が限られていた症例に対し、個別音楽療法で楽器演奏を行った結果、新たな意思疎通方法が獲得された。継続的な音楽療法は、脳血管障害慢性期患者に対しても有用である。

カテゴリ 1 群 101 入所

カテゴリ 2 群 206 データのある「効果」の提示

カテゴリ 3 群 E3318 その他コミュニケーション